

# 緑のまきば

1986 No.24

小金井緑町教会  
 小 金 井 緑 町 教 会  
 小金井市緑町四一十六一三三  
 電話〇四二三一八一七九六一  
 編集 牧師 山 本 圭 一

## 今、ここに生きる神の民

— 創立二十年を迎えて —

山 本 圭 一

1 恵み深い神のことばの支配 “たどりつき振り返りなば峰々を越えては越えて来つるものかは” 昭和の初期、進歩的経済学者として幾多の試練の中に生きた河上肇（一八七六一一九四六）の歌である。開拓伝道を始めて二十年、その間「まことの教会について、それはすべての敬虔なる者の母である」ことを知らされつゝ、その峰々を越えることの苦渋をいくらかでも味わい知った。われわれの教会が単純にまことの教会と一致するのではない。教会がわれわれの母であるのは、神が教会のうち

に福音の宝を宣教すべきものとして依託したもう限りにおいてなのである。この福音こそ生けるキリストである。キリストがわれらの中に臨み、主のみ言葉が聞かれるところ、そこに教会がある。この教会の目じるしこそ、み言葉の説教が正しくなされ、主の命じ給うた洗礼と聖餐の礼典（サクラメ

ント）が正しく執行されることに上る。そのゆえに、個々のキリスト者は互いに結び合わされ、キリストの体として建てあげられ、かしらなるキリストにあつて、すべての部分において成長し、互いに一つとなる。だから教会は信仰者の上に重苦しく位する制度ではない。生きた有機体、相互に奉仕する交わりである。私たちの賜物は皆同じではない。それぞれ異った賜物を与えられており、それを働かせて主イエスの救いを証しし、兄弟姉妹を愛をもって励しあうのである。このような使信において大切なことは、個人の救いでも、また多くの人の救いでもなく、根本的には救いをもたらす給う主イエス・キリストと、この方がすべての民に打ち立てられた恵みの支配である。礼拝や主の名による集会において注意しなければならぬのは、救いのことばが個人に

対して与えられるという点と、それにもかゝらず、同時にキリストの体である教会に向けられているという二つの点である。教会は個人を度外視はしないが、教会を生きたもの、有機的に一つの体に組み合わされた共同体、神の民の集団として自覚する。いかに小さくてもこの教会に生けるキリストが現臨し給う限り、いかなる嵐に耐え得るばかりでなく、み言葉が新しい道を示すならば、歩み馴れた道を捨てて、積極的に外へ踏み出さねばならない。これがわれらの先達たちの戦いであつた。

2 現代人の感性の中へ しかし、そこには常に迷いがつきまとう。迷いは今日の技術の進歩とさまざまな制度の自由化に伴って一層倍加し、現代そのものが巨大な迷いの埒<sup>ら</sup>の中にある。例えば昔には天命か自然現象と思われたことも、人間が迷いながら選ばねばならない。配偶者の選択や子供の出生はもとより、その性別の決定すら個人の意識的行為になりつゝある。思想や信条への忠誠や人間の純愛は、かつては無条件の美德であつたが、今では頭脳の硬直や自己陶醉の変形ではないかと疑われるようになった。激しさよりは優しさが、真実の一義性よりは両義性が尊ばれ始めて、その分だけ個人の明快な選択は難しくなつた。人生に最終的な目的などを見ず、自分の内に絶対の主張もないことを感じながら、しかも自暴自棄にならず、丹念に生活の細部を選んでいく。すべては移ろうと知りながら、自分の選択に傲慢な確信は持っていない。その不安に耐えるというより、迷路の遊園地を歩くような一種の楽しみに近い表情を浮べている。

3 われは教会を信ず その最大の衝動は、孤独や失敗の淋しさではなく、どんな充足も人生の最終決着にはならないという感覚であるうか。それは永久にいやし難い淋しさである。

敗戦後四十一年、あの極限的な緊張と狂信の時代から、今、やつと広漠とした地平に、迷いつゝ淋しさをこめて立っている。

この今日の状況の中に、最初に述べた生けるキリストの現臨とご支配は、今、日本における力強い希望である。すべての雲霧を吹き払う強烈な風である。そのことが人格的真理として、日本の文化をその根底から再編する日本の宗教改革、日本人の精神的革新をうながすのではなからうか。教会の形成と宣教の課題は、同時に祖国の命運にかゝることを覚え、その託せられた原点に立ち返つて、再び共に歩み出そうではないか。